

【佳作】

離巖流

「武蔵を討ち取れ。」背後の船島に響き渡った怒号が徐々に遠ざかる。渡し小舟の上で、決闘での息切れを落ち着かせた。後ろを振り返ると、浜の方に数人検分役が見え、倒した小次郎の安否を伺っている。島には陣幕が張られ、外から中の様子が見えなくなっていた。また、まだこちらに向かって声を荒げている者もいる。私は小次郎を殺してはいない。じきに息を吹き返すであろう。

しだいに息が落ち着き、怒号が遠ざかるにつれ、先ほどの決闘が脳裏によみがえる。一瞬の出来事であった。勝負は、この削った小舟の権が小次郎の頭部へ届き、一撃で終わった。私の勝利である。しかし、勝負には勝ったものの、私の心の中には今もまだくすぶり続ける戸惑いと違和感があった。

小倉藩の剣術師範であり、弟子も多く従える優れた剣士と聞いていた。だが、先ほどの太刀筋を見るに、とても噂通りの剣士に見えなかった。もちろん、剣術や気迫は間違いなく一流といえる。太刀筋には鍛錬の成果と一貫した剣士としての流儀が感じられた。しかし、未完成である。彼は、噂ほどの実力とは言い難かった。彼は聞いていた

通り、長刀を用いていたが、明らかに使いこなせてはいなかった。長さがある刀は、相手より間合いが取れるという利点があるが、その分重い。俊敏さに欠けた剣術は、一對一の決闘において不利である。あの動きでは燕返しも使えなかったであろう。そもそも燕返しは小太刀でやるべき剣術である。あのような長刀で行うのは至難の業である。あのような長刀で行うのは至難の業である。

そして、何より相対して一番驚いたことは、私よりも彼が若人であったということだ。

まだ十八ほどにも見える彼の容姿は、とても剣術指南を行う者には見えなかった。

波に揺られながら、そのようなことを考えていた武蔵に対して、小舟を漕いでいた船頭は漕ぐ手を止め話しかけた。「今日は二刀流を使わなかったようだな。武蔵。」武蔵は突然の声に驚き、剣を構えた。

「何者だ。名を申せ。」老人は目を見開き、雷のような声で叫んだ。

「刀でしか語り合えぬか、刀を下ろせ、この臆病者め。」白髪のは肩にかかるほどの長髪で、

国際日本学部 日本文化学科3年 大島 颯太

まるで女のような髪型である。しかし、狩りをする鷲の如く眼光は鋭く、老人にしては威勢のいい姿勢であり、武士の面影が感じられる。そして、額にある傷が、勲章の如くその老人の不気味さを彷彿とさせた。老人が口を開く。

「お前はわしに勝てない。先ほどの闘いで、お前の剣は見切った。わしの燕返しは小次郎とはわけが違う。速度は優に音速を超えるぞ。」といううと、船底においてあった長刀を手に取り、素早く構えた。小次郎よりさらに長い刀である。一瞬で感じるその構えの覇気はすさまじいものであった。素早く構えたにもかかわらず、水面一つ起きないその動きの無駄のなさは、神の所業のように感じた。会話の空白が、老人への恐怖感を助長させた。

「先ほどの闘い、見事であったぞ。名を言っていないかったな。わしの名は岩流。小次郎の師範だったものだ。」武蔵はわからなくなった。巖流とはすなわち小次郎が決闘の際に名乗った号（本名とは別に使用する名称）と一致していた。俄然緊張感は続く。武蔵の顎からは、汗がばたばたと船底に垂れていた。

「巖流と申したか。それは小次郎の号ではないのか。なぜ同じ名なのか。」嘆れ声で、老人は説明した。

「あいつはわしの数少ない弟子のひとりで、号を継がせていた。岩流という号と共に、流派も継いでいってもらいたいと考えておった。わしは陰で小次郎を支え、小次郎が小倉藩の剣術師範として迎えられることになった際も、わしが助言してやるからなれ、そう言っておった。ただ、岩流の顔になるのだから、お前が岩流を名乗り、わしの存在は隠せ。そうすることで、小倉藩でのわしらの地位を維持できる。そう考えた。」老人の話を聞いていた武蔵は、そつと刀を構えるのをやめた。その様子を見て、老人は少し微笑んだ。二人のほかに誰もいない、海上での静寂が、武蔵の闘争心を沈めた。老人は言った。

「ほうほう。刀がなくても語り合えるか。腕つぶしのいい荒くれ者だと思っておったが、礼儀の分かる小僧じゃ。」老人の眼光は緩み、緊張感は和らいだ。老人も刀を下ろす。老人は続ける。

「ある日、小次郎のもとに小倉藩の細川家の誰かから、宮本武蔵との決闘を提案された。わしは反対した。あなたは腕の立つ剣豪として名をはせていた。小次郎はわしの弟子とはいえ、まだその境地には達していないと判断した。それに、あれは小次郎をよく思わない勢力による小次郎つぶしであったと考えておる。決闘に乗じて小次郎を殺し、厄介者を排除しようとしてたものにしか見えなかった。しかし、小次郎にそれを伝え、いくら

説得しても聞く耳を持たなかった。小次郎なりの判断だ。わしには止める権利はない。」

「なぜ決闘の時止めに入らなかつた。いくらでも止めることはできたはずだ。」とは言えなかつた。

武蔵は、そこで罪を知った。武蔵は弟子にそのかされ、名譽のために小次郎を倒した。武蔵にとつては今回もただの決闘。しかしそれは、小倉藩のはかりごと利用されただけだと知った。

「岩流殿、小次郎は死んでいません。私は太刀の手ごたえで相手の安否がわかります。小次郎には木刀を振りましたが、急所は避けております。」罪から逃れたく、そう言った。

「残念だがな、こんな絶好の機会を細川は見逃さない。お前の弟子か何かに罪を擦り付け、殺害するに違いない。小次郎には妻子もいて心配じゃ。どこか匿う場所を見つけては。もちろん、お前も例外ではない。小倉藩には菌向かってこられないように、弟子が約束を破り、小次郎を卑怯に殺したことを小次郎の弟子に伝え、殺害を図るつもりじゃ。」

武蔵は細川家の誰かもわからない相手に恐怖を覚えた。こんな鬼畜の所業をさせておいて、それが誰かもわからない。しかも、その鬼畜の所業に自分自身が加担していると思うと、とてつもない嫌悪を感じた。

「武蔵、お前がこうなることはわかっていた。小次郎の弟子に直接誤解を解きたいが、わしは顔を知らない。今残ったわしの弟子は小次郎のみだ

からな。それにもうわしは年寄で戦えない。だから、この先の門司城の沼田延元という男に話を付けておいた。そこでしばらく匿ってもらえ。」そういうと老人は何も言わず、舟を漕ぎ始めた。武蔵は何も言えなかつた。

門司に着くと、老人は話し始めた。人影の少ない深夜の港である。「武蔵、五輪は知っているか。」武蔵は答えた。「知っています。」「お前がこの先、生き残るには剣を捨てろ。戦場を捨てろ。本当の強者は戦場にはいない。空を極める。空の世界での武器は筆だ。空において重要なのは、剣術に同じ。何を描くかでも、何で描くかでもない。どう描くかだ。門司城へ迎え、武蔵。」そつ言い残し、去っていった。

門司城の途中で、武蔵は百舌鳥を見かけた。容姿の可愛らしさに反して、獷猛な鳥である。一本の長い枝に止まった。その下には、一匹の芋虫が速賢にしてある。百舌鳥は枝を道具のようにして使い、芋虫を貫く。狩りをする百舌鳥の眼光は鋭く、闘志を垣間見えた。

生き物は生きるために誰しも武器を持っている。しかし、人間は持つていない。持つていないからこそ、どう生きることが問われているのかもしれない。武器は空である。空っぽというわけではない。虚しいものではない。重要なのは、空であることを分かつたうえで、実の道を創造していくことである。

船島は現在小次郎の流派から巖流島と呼ばれている。

コメント

巖流島の闘いは、諸説がたくさんあったり、創作が事実のように伝わってしまったりという状況であることを知りました。例えば、武蔵が遅刻して巖流島に着いたというのはフィクションであり、しかしそれが一番有名な巖流島のエピソードとして現代に広まっています。しかし、それは小説を書いた作家にはあまり責任はなく、読者がフィクションであると知らないうちに事実かのようになってしまうことに責任があると感じました。フィクションを見るときに重要なことは、すべてが嘘だと考えるのではなく、嘘かもしれないと思っただけと考えることです。この作品はフィクション（歴史改変）なので、そのように読んでいただけると嬉しいです。